後期高齢者のひとりごと

「生・老・病・死」を生きる

今年で後期高齢者の仲間に入る。どうやら老・病の先に死を見据える時期になったらしい。

老と病の真っ只中にある私に、世人は誰しも、健康で長生きするようエールを送ってくれる。そんなとき、あなたもいずれ行く道だから楽しみにして、と答えることにしている。

すると、相手は怪訝そうに軽い笑みを浮かべる。

勿論、老・病・死は誰もが厭がることである。娑婆のタブーである。だから、怪訝そうな笑みの裏には、あなたは行くが私はまだ行かないよ、という無意識が見え隠れする。場合によっては、このタブーが共有できない違和感を隠せない方もおられる。

このような天邪鬼な性分を自認する私としては、娑婆での常識、老・病・死に対するネガティブな感情がどこから来るのか、考えてみたくなる。

とりあえず、「病」と「老」を自らの経験を踏まえて俎上に上げてみる。「病」は健康が損なわれることである。健康とは、身体の生理機能が正常にはたらき、自意識の主宰である「私」を仮構し、持続させ、外からくる問題をうまく処理しながら、「私」の意向のもとに外界に自らの思い描く目標を実現するべく努力ができる状態だ。

多くの場合、完全な実現は不可能だが、ある程度の成果を得て良しとする。そして、一連の努力と達成感を脳の記憶に焼きつける。このような身心の生理機能に不具合が生じた状態を「病」という。これを専門医が判断して処方を施すことになる。

一方、「老」は、このような身心機能の低下が細胞レベルで起こる再生劣化によるらしい。細胞劣化を直接意識できないが、自覚できる症状ははっきりしている。周囲の状況をすばやく察知して対応する能力が衰える。動的視力が落ち、躓いたりはしょっちゅうだ。さらに、出来たと思った途端、見当違いをして周囲からお叱りを受ける。実現努力を持続することが難しくなると、自分のしたことを記憶に止めることが出来にくくなる。

記憶を鮮明に取り出せなくなって「あれ・これ・それ」を頻発する。記憶を鮮明に取り出し難くなるから、感動も薄らいで日々のワクワク感がない。ただひたすら時間が矢のように過ぎていく。これが私の「老」の実感である。

「病」は適切な指導や処方で改善することが出来るが、「老」の本質は不可逆的で、その速度を遅らせても、止めることは出来ない。最終段階で、「老」と「病」は互いに関係し合ってカオスに向かって進行する。この段階では能動的な自意識と受動的な感覚だけがかろうじて残り、身体機能である呼吸・脈搏・瞳孔反応等が停止するに至って、速やかに感覚と自意識を消失する。この状態を世間では「死んだ」と言う。

「死」の因を辿れば「生」である。つまり、「私」の存在状態は自意識の発現を待って始まったことだ。正しい誕生はこのときで、世間で言う誕生日は分娩日のことである。

仏教では人の誕生を「父母の清血を縁に、自らの業識により娑婆世界に生ず」とする。補足すると、業識とは自意識の源流である。まず、父母を縁にして身体が出来、後から脳に知覚と認識と記憶の機能が整い自意識の発現となる。そこで若いうちは身体が自由に動くため、自分のものだと勘違いする。これが迷いの一丁目一番地だ。これを知るために老・病・死の行があるということだ。

ここまで話を巡らせて、やっと釈尊の説くところの「私」の正体が見えてきた。「生・老・病・死」は「私」の状態を表すもので、「私」は多くの条件が整って発現するもので実体がないと言うことだ。

釈尊はこれを「娑婆は燃えている」と表現した。何が燃えているのか、煩悩が燃えているのである。これはよく蝋燭の炎にたとえられる。蝋燭の燃焼は燃料と空気と温度が整って何かのきっかけにより発火し火がつき炎が持続する。条件（縁）によって、静かに燃えていることもあれば火花を散らして燃え上がることもある。

この比喩をとおして釈尊は「私」という発現は煩悩が燃えている状態だと言われた。だから、昨日の「私」と今日の「私」とは条件（縁）が違うから燃え方が異なる。まったく別物であるが、脳の記憶機能を通して同じものだと錯覚していることになる。

さらに、仏教では「人は、一人生まれるのに冥く、一人去るのになおまた冥し」と説く。主体としての「私」の誕生と死去はまったく自ら意識できないと言うのだ。このように仏説は認識対象としての「生・死」を説かない。つまり、ここでは主体と対象という主従構造が無効であるから、自意識の発現（誕生）と消滅（死滅）を「私」が自覚することはあり得ない。

「仏」や「浄土」を「私」が認識し理解する対象として考えると、何も見えてこないのはこのせいである。

だから、釈尊が説く「生・老・病・死」は娑婆での認識対象としての「生・老・病・死」とは全く異なるものである。結局のところ、「私」のできるところは仏教の説く「生・老・病・死」を貫いて生きぬく大きな識の流れ、これを仏教では業識というが、この業識が信心を通して浄土の流れに転換する以外に解脱の道はないことになる。

南無阿弥陀仏